

首都大学東京都市教養学部人文・社会系
首都大学東京人文科学研究科.
「人文学報」第473号
(日本語教育学)
2013年3月抜刷

パラオで話されている日本語の実態

——戦前日本語教育経験者と若年層日本滞在経験者の比較——

ダニエル・ロング 今村圭介

パラオで話されている日本語の実態

——戦前日本語教育経験者と若年層日本滞在経験者の比較——

ダニエル・ロング
今村 圭介

1. はじめに

本稿は、かつて日本の委任統治だったパラオにおいて、公学校などで日本語教育を経験した戦前日本語習得者（以降、「戦前話者」と日本に滞在して日本語を習得した若年層の日本語習得者（「若年層話者」）の日本語を比較し、共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

これまで、残存日本語の研究と、一般的な第二言語習得の日本語話者が話す中間言語の研究はそれぞれ独立して行われてきている。そのため、両者の実態は明らかになっているが、質的にどの様に異なるかは認識されていなく、両者とも「第二言語習得者の日本語」として一括りに捉えられてしまうことも少なくない。そこで、両者を比較することで、異なる環境において言語習得された日本語の特徴を浮き彫りにしたいと思う。

1.1. 戦前と戦後の言語習得環境

第1次世界大戦から第2次世界大戦までの30数年間、パラオは日本の統治下にあった。当時は日本語による教育が行なわれたが、本土から移住して来た日本人住民が多く、一時はパラオの全人口の9割を占めるまでとなった。そのために、戦前育ちのパラオ人はマリアナ諸島民と並び、日本語を非常に流暢に（人によってネイティブ並みに）話せるのである。戦後日本人が「内地」へと引き揚げた後でも、日本語を使い続けたパラオ人も少なくなった。例えば、

ヤップ人やチャモロ人の配偶者を持ったパラオ人は家庭内で日本語を使い続けた（ロング&新井 2012）。日本に親戚を持った日系パラオ人も彼らとコミュニケーションをとる時に日本語を使用していた。さらに、1990年代からは日本人が経営するパラオのダイブショップで仕事をしながら日本語を自然習得し、会社の研修などで日本に長期滞在することでさらに日本語習得を続けたという若年層（20～30歳代）話者はけっして珍しくない。

1.2. 調査について

本稿では、2タイプのパラオ人日本語話者の会話データを分析する。分析対象は、筆者二人と話者の（場合によっては話者の親類1人も同席した）半構造化インタビューと数週間の参与観察によって得た会話データである。第2節で、戦前の日本委任統治時代に日本語を習得した老年層話者の言語特徴を分析する。第3節で近年、パラオにある日系の会社で働く中で日本語を身につけてから、日本にも長期滞在して日本語を自然習得した若年層話者を取り上げる。

2. 戦前に日本語を習得した話者の特徴

本節では、戦前に日本語を習得した老年層話者 Humiko Kingzio (HK) (1931年生まれ女性)、Toshiwo Akitaya (TA) (1929年生まれ男性)、Kyoko Ngotel (KN) (1932年生まれ女性)、の3人のデータを分析する¹。TAとKNはそれぞれ一時間程度の半構造化インタビューを行っている。また、HKに関しては、数週間にわたって録音・録画調査を行った他、参与観察を行い、特徴的な表現などを筆者二人で書きとめた。そのため、分析はHKを中心に行う。なお、これらはケーススタディとしての分析であり、これらの個人がこの世代を代表する話者であることを証明する分析ではない。しかし、これまで多数の面接調査で得

¹ パラオ人は日本語が話せることを誇りに思っている。本研究は当然ながら話者の承諾を得て行われたものであり、彼らの協力なしでは実現しなかったのである。実名で成果を公表することによって、彼らへの感謝および敬意を表すことになるのである。

た情報から、当該の話者は決して特殊な日本語話者ではないことは確かである。

話者 HK はパラオのンゲサル州 (Ngchesar) に、沖縄出身の父とパラオ人の母との間に生まれた。HK は、パラオ人のための公学校、日本人住民のための小学校の両方に通った経験がある。それぞれの環境は異なり、前者はバベルダオブ島 (農漁村部) にあり、後者はコロール (都市部) にあった。話者 TA はパラオ人の母と東北出身の父との間に生まれる。幼少期はアングウル島の国民学校に通った。1956年までアングウルで過ごし、その後コロールに移り、現在までコロールで暮らしている。話者 KN はパラオ人の母と沖縄出身の父との間に生まれる。国民学校に通い、パラオ語は初め話せなかった。戦後パラオに残りパラオ語を習得するとともに、免税店で働き日本語の維持に努めた。以下で項目ごとに三人の話者にみられる言語特徴を記述し、分析する。

2.1. パラオ語の語彙の入れ込み

パラオ人が話す日本語会話の中に入り込むパラオ語の語彙の種類 (異なり数) は少ないが、その使用頻度 (延べ数) は比較的多い。パラオ語の肯定の応答詞の chochoi [ʔoʔoi]、chacha [ʔaʔa]、感動詞の choi [ʔoi]、chochoi [ʔoʔoi] などが、日本語の会話の中でも使用されていた。通常、第二言語習得話者は目標言語内の会話では、相手の理解を考えて自分の母語の単語は使わない。しかし HK は戦前、日本語と母語の両方が話された環境で日本語を使用していた。そのようなバイリンガル環境では、言語接触が起こり、ある単語が別の言語の中にも取り込まれることがある。特に応答詞や感動詞は、混ざりやすいことが指摘されている (Auer 2006、今村2012)。そのような語彙の入れ込みは本来、2言語が理解できる話者同士で起こると考えられる。しかし、HK はパラオ語を理解しない筆者らに対して、このようにパラオ語の語彙を取り入れて話をしている。その理由は二つ考えられる。(1) 応答詞や感動詞は伝達内容が少なく、意味解釈に間違えが起こりにくい。(2) パラオで長くそのようなスタイルで話をしているため、矯正が難しい。

肯定にしても否定にしても応答詞は、発話がそれだけで完結することが少な

く、その後の発話内容だけから発話意図がわかる場合が非常に多い。そのため、応答詞が理解できなくても意味解釈に影響することが少ない。さらに、バイリンガル環境で育った話者 HK は、そのようなスタイルを長く使用していたため、日本語で話す場合も、その点の矯正が難しいのだと思われる。確かに、日本のテレビ撮影をした時にはそのようなパラオ語の単語は出てきていなかったため、モニターをかけて制御をすることができるようである²。しかし、筆者らは調査を複数回行い話者 HK と良好な関係を築いているため、特にモニターをかけずに、このようなパラオ語の語彙が取り込まれるカジュアルなスタイルで話しているのである。

2.2. 日本語起源のパラオ語の使用

日本語からの借用語としてパラオ語に入った語彙を、パラオ語の発音や用法で使う例が見られた。例 1 にみられるように「タマ」という語を「蛍光灯」の意味で使用している。HK が話している「蛍光灯」は大型天井扇風機と一体になっている照明器具である。しかも、スパイラル形状の電球形蛍光灯を使うものである。標準日本語で白熱電球のことをタマと呼ぶのは古い感じはするが、可能である。しかし、スパイラルの物になるとタマが使えないであろう。

1. それ（換気扇）つけると、タマが落ちる

日本語からパラオ語に入った「タマ」は、2つの側面において意味が変化しているのである。一つは「形」(form) による意味拡張で、もう一つは「機能」(function) による意味拡張である。蛍光灯を「タマ」と呼ぶのは、球^{たま}の形とは異なる物だが、電球と同じ「機能」(明かりを灯す) を果たす物である。一方、パラオ語で「タマ」は球形の揚げ菓子 (「サーターアングギー」) をも指す。こちらの意味変化はむしろ「形」による意味拡張が原因である。例 1 で HK が

² 2010年に筆者(ロング)が放送大学のために録画した放送教材。

使っているタマは、パラオ語に入って意味拡張をしたタマを、日本語に再び取り入れて使っているものである。

例1にみられるのは意味面におけるパラオ語の影響だが、加えて発音面におけるパラオ語の影響もみられる。KNは「電話」を *dengua* と発音している。これは日本語からパラオ語に入り発音が変化した「*dengua*」を、パラオ語の発音のまま日本語に入れ込んで使用しているのである。

2.3. 残存形

ロング・新井（2012）では日本本土ですでに使われなくなった単語が北マリアナ諸島など旧植民地及び小笠原諸島で今も使われているという「残存形」現象を取り上げた。パラオの話者HKにもこうした「残存形」が多数見られた。以下、パラオで使用されている語形と、それに当たる一般的な表現を括弧内に記す。なお、こうした残存形のサブカテゴリーとして、日本本土において差別的に転じているものも挙げられる。以下はその使用例である。

表1 残存形および差別用語転義型残存形

残存形	
色眼鏡 (サングラス)	
電気柱 (電柱)	
木建ての家 (木造の家)	
午後から天気がくだる (くずれる、cf.「くだり坂」)	
豚箱 (牢屋)	
十五夜 (満月)	
油 (石油)	
差別用語転義型残存形	
部落 (村、村落)	
黒んぼ (黒人)	

戦後のパラオは日本社会から切り離されていた。日本とのコンタクトが皆無ではなかったが少なかった。それに戦後にも日本語を習得した人がいたものの、パラオにおいて日本語は上の世代にしか使われない言語となっていた。これらの要因によって戦後感覚の日本語はパラオには伝わらなかったのである。

2.4. 沖縄のウチナーヤマトウグチの影響

パラオに移住した日本人は、沖縄出身者が35%ほどを占め、都道府県別の出身地として最大のグループであった（南洋庁編 1934）。

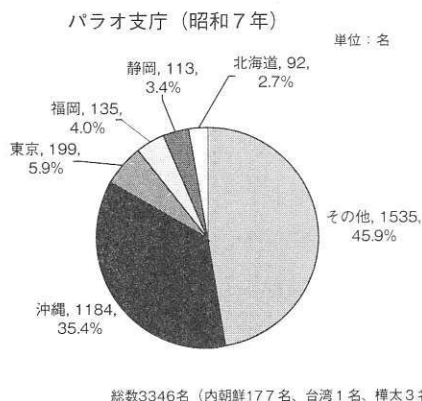


図1 戦前パラオの日本人人口（出身地別）

そのため、パラオの日本語に沖縄的な表現が多く聞かれることがある。これは伝統的な琉球語ではなく、その影響を受けて形成されたいわゆるウチナーヤマトウグチである。まず語彙的な特徴としてHKの発話に「お昼あと」（お昼すぎ）、「アメリカさん」（アメリカ人）、「名々（めいめい）」（それぞれ）、「あれ（たち）」（あの人たち）、「二名（ふたり）」、「かた [方]」（ひと）、などが見られる。「それぞれ」や「各々」という意味の「名々」（例：めいめいの車を持っている）は標準語で言えないわけではないが、HKのように日常会話で頻繁に使うのはむしろ沖縄の特徴であると言える。また、「あれ」（複数は「あれたち」）は、三人称代名詞として使用される。本土諸方言でも軽蔑的な意味を込めて三人称代名詞として「あれ」を使用することも考えられるが、話者HKが使用するのは沖縄的な、特に待遇を表さない「あれ」の使用である。さらに、尊敬語ではないのに「ふたり」という意味で「二名」を使うのも沖縄的である。「四名乗りの車」や「妹は子供が三名いる」のような言い方も聞く。さらに、HK

の「かた」も同様である。確かに標準日本語でも、「ひと」を「かた」と置き換えられる場合もある。しかし、HKのように、自分の兄弟について語るときや一般的な話（「税金を払わない方がいる」）にも「方」と表現することはないであろう。

語彙だけではなく、文法にもウチナーヤマトウグチの影響が見られる。その特徴的な文末詞「ワケ」の使用が見られる。標準語のモダリティ表現である「わけ」は、「伝達補助動詞」と言われ、「説明」や「因果関係」を中心に用いられる表現であると言われている。「つまり……」と共起して、既に述べていることの繰り返しや明示化をする場合に使われる。これに対して、ウチナーヤマトウグチの「わけ・だわけ」はこれに比べて意味が薄れており、標準語の文末詞「の」に近い意味合いである。例2はHKの「わけ」の使用例である（なお、Rは「研究者」、つまり聞き手のことを表わす）。質問に対する話者の答えに「わけ」が付いているが、標準語なら「移動したの」などするのが一般的であろう。

また、親が東北地方出身のTAには沖縄を含む西日本的な表現が見られた。次の例のように、「よる」（例3）や「おる」（例4）を、西日本共通語と同じように継続相（進行態）の意味で使っている。

2. R: あの木は切り倒したんですか?

HK: あー、あれは〇〇さんが移動したわけ。

3. 前も日本人がその、リン鉱石を運びよりましたね。

4. 班長として島民を使っておったらしいんだよ。

2.5. 八丈方言の影響

パラオでは沖縄のほかにも八丈方言の伝承と思われる表現もいくつか残る。まず「カノ」（カヌー）という発音が聞かれる³。また、パラオで薩摩芋のことに

³ なお、「枯野」という表記が見られることから「カノ」は八丈古来のことばだという話があるが、これは学術的根拠がない。カヌーは英語から小笠原に渡り、そこから小笠原ことばの源の一つである八丈島に逆流したのである。

「サツマ」という略称が用いられる。これも八丈で一般に用いられる名称であり、そこから伝わったと思われる。

パラオでは、「八丈島」を「ハチジョウシマ」と発音する人はいる (Santy Asanuma 2010/9/17 録画インタビュー、Reiko Uehara 2012/2/13 録音インタビュー)。実は濁らないこの発音は、八丈島で若年層を含めて一般的に使われているので、昔の八丈島民の名残だと言えよう。

なお、サイパンで耳にする「西日本共通語」(打消しの「ん」、存在「おる」、アスペクト「とる」、指定助動詞の「や」など、ロング&新井 2012) はパラオではほとんど聞かれない。

2.6. 文法的な誤用

話者 HK には文法的な誤用が気づかれにくい点に表われる。例えば、「熟すれば→熟せば」の誤用が見られるが、これは日本語レベルの極めて高い非母語話者にしか見られない高度な誤用でもあり、日本語母語話者にとってもさほど抵抗のない(気付かれにくい)誤用とも言えよう。同様に標準日本語では「つもり」の前ではこうした願望表現が使えないが、HK には「新しい家を建てたつもり」という誤用が見られる。以下では文法的誤用、あるいは誤用でなくても母語話者が違和感を覚えるバリエーションを数例取り上げよう。

まず、テンス(時制)に不自然さを感じる時がある。現在系と過去形は、パラオ語には(文法上の)区別がない。そのため、過去形を使うべきところで現在系を使う場合が HK に見られた。談話では、史的現在用法(過去の事実の叙述を生き生きさせるために用いる現在時制)が使われる場合もあるが、それをさし引いても現在系の使用が多い傾向にあった。

また、HK には、細かい複雑な活用や、形態論的ルール、意味論的ルールの誤用が見られる。「持っていかれるから」(持って行けるから)という可能形式が HK の発話に見られた。関東地方でも「私は(用事があって)行かれない」という可能表現を本動詞として使う人は(特に年配の女性話者)には少なくない。歴史的に言えば、五段動詞の本来の可能形は「一人でも行かれる」、「寒く

て泳がれない」、「難しい字でも書かれる」のような「—られる」を付ける形だった。現在の東京語（および標準語）において5段動詞のほとんどは「-eru」を付ける形に変化しているが、使用頻度の高い「行く」のみに古い形が残っている。しかし、ここで問題にしているのは補助動詞としての「行く」であり、本動詞のように「行かれる」とならないのではないだろうか。

さらに、関東地方で耳にする本動詞「行かれる」は人間が主語になっている場合がほとんどだが、パラオの話者から「(滑走路が短くて)大きな飛行機は行かれない」のように、物が主語になっている場合にも普通に使われる。

原因が推測できる誤用もある。例えば、同一の談話内で話者が「ネズミはいる」と言っていたにも関わらず「豚はあるよ」と発言している。この時話者は明らかに食べ物ではなく生きた動物としての豚の話をしていたので、誤用であるのは確かだ。もちろんこれはたまたま起きただけの「ミステイク」としての誤用かもしれない。しかし、気になるのは、データはけって逆のパターンの「ネズミはある……豚はいる」になっているわけではない。「いる・ある」の誤用が見られたのは、豚だったのは果たして偶然とは言えるだろうか。豚は食料として「ある」は使用される場合が多い（「豚はあるけど、玉ねぎがない」）が、ネズミはそうでない。「いる」も「ある」も両方日常的に使われる名詞（豚）から二つの混乱が始まったのは興味深い現象である。こうした「隙間」から誤用が発生するのであると考えられる。

最後にここで取り上げるのは、形容動詞の「な」の代わりに「の」が使われた誤用である。例えば、「わずかの卵はたべる」、「色々の……」などの誤用が、けって少なくない頻度で見られた。しかし、「名詞」と「形容動詞」の区別には、母語話者にも揺れが見られる点がある。鈴木重幸は、「な」と「の」を取るものとして、「特別、独自、別、格別、容易、高度、最適、種々、わずか、さまざま、不足、旧式、早熟、博学、不順、不品行」を挙げている（鈴木1978：432）。つまり、筆者らは違和感を覚えるが、鈴木の見解では、「わずかの」は容認されるようである。しかし、「色々の」は多くの日本語母語話者が容認しないものではないかと述べている。

以上の例を見ると話者 HK の文法的誤用は、母語話者の間でも揺れが見られる領域から母語話者が完全な誤用と意識する領域まで広がっていると言えそうである。

一方、TA と KN には、いくつか文法的誤用が見られた。

例 5 では、「太りたい」という意図の発言が、「太るのが一番好き」という表現になっている。例 6 では、話者が「動詞+たことがない」という経験表現を使っているが、文脈から判断して言いたかったのはむしろ「6 年間沖縄に行っていない」ということだったので、アスペクト表現が適切である。例 7 では、形容詞一名詞の連体修飾の間に「の」が挿入されている。例 8 では、時間表現と条件表現が混在し、意味がどちらか、分からない文になっている。

5. KN: あたしは太るのが一番好きだけど、全然太らない
6. KN: もう六年になりますね、沖縄に行ったことがないんです。
7. TA: 安い方を買った
8. KN: もしもねー、パラオ語の歌を作るときには、日本の曲を持って、そしてパラオの歌を作る。

2.7. 個別単語の意味論的な拡張による誤用

2.7節、2.8節では、意味論的な誤用を分析していく。まず、ここでは「個別単語の意味論的な拡張」という誤用を取り上げる。HK の談話には、語彙の意味を周辺まで拡張させているような意味的な誤用例が多く見られた。「今回→現在」、「あげる→渡す」、「もったいない→かわいそう」、「クセ→習慣」、「独身→未亡人」、「月給→年金」、「慢性になる→癖になる」といった誤用を見してみる。

例文 9 では「昔」と「今」を対比している文脈であり、単純に「今」というところで、「今回」を使用している。もちろん、「前回」と「今回」など、ひとくくりの回数が数えられる事象を指し示して対比させることあるが、HK は明らかに時代全体を示している場合でも「今回」を使用していた。

例文 10 は、「あなた方が来た前の日の晩」という意味で「あなた方が来た夕

べ」と言っている。「夕べ」は今日を起点とした前日に対して使われるが、「あの日の前日の晩」の意味では使えない。つまりHKは「昨日の晩」を表す「夕べ」を、「特定の日の前の日の晩」を表すように拡張利用している。実は母語話者にも似たような拡張利用は見られると考えられる。「一年前の今日」は、当日のことしか表せない「今日」を「一年前の同じ日」に拡張利用しているのである。「夕べ」も「今日」もダイクシス（直示）表現である。つまり、使う時点によって指している時期が異なる。「夕べは暑かった」という発言を25日にしたら、「24日は暑かった」という意味になるが、同じ発言を26日にしたら、「25日は暑かった」という異なった意味を持つ。「今日」も同様に発言の時点によって表している意味が異なる。一方、「前の日の夜」はダイクシスが関わっていないく、「来た日」が5日だとすれば、「あなた方が来た前日の晩」は「4日の晩」を表している。発言が25日になされても、26日になされても「4日の晩」と、表している意味が変わらない。

例文11では、「瞬間」が「頃・時」まで拡張利用されている。HKが言おうとしたのは、「女学校も入学式の出席したちょうどその瞬間に」ではなく、「女学校の新学期のシーズンが始まる頃」ということである。時間関係の意味的拡張はこのように数例出てきていることから、パラオ語の影響など考えなければいけないが、詳しい考察は次稿に回したい。

例文12では、「アゲル」を「渡す」という意味まで領域を拡張している。例文13の「籍に入る」というのは普通は帰化する個人の場合に使うが、HKが「パラオがアメリカの一部として所属した方が良かった」という意味で使っている。例文14のように、「クセ」の意味領域拡張も見られる。日本語のクセは無意識に行われる習慣的な行動を指すのが普通だが、例文5では計画性のある意図的の行為に対して使用されている。

9. HK: 昔は問題がいろいろあったけど、今回はない。

10. あなた方が来た夕べ……

11. 女学校に入る瞬間に戦争が始まって……

12. R: 車のカギはどうしたらいいんですか?
HK: 弟にあげてもいい。(弟に渡せばいい。)
13. (パラオ全体が) アメリカの籍に入ってた方が良かった。
14. HK: 養殖しているところで夜潜ってシャコガイを盗むクセのある方はいる。
15. HK: あの人は糖尿病ですよ。
R: ええ? でもまだ30代ですよ。
HK: もったいない。

例文15の「もったいない」の使い方を見ても、意味領域の拡張が見られる。「もったいない」は人について使われる場合、自分の意志によって行われたことに対して、話し手が残念な気持ちと共に否定的な評価を下すために使用される。例えば「A: 彼大学に進学しなかったみたいだね。B: 頭よかったのに、もったいない。」のような例が典型例である。対して、受験に落ちた場合には、当事者の意思に関わらないため、「もったいない」とは言えないのである。HKは、話題の人物が自分の意志に関わらず起こってしまった病気に対して「もったいない」と述べている。

また、KNも意味論的な拡張が見られた(例文16)。

16. 全然、沖縄の言葉話す時は、慢性になったら、日本語話す時は発音[hatsuno]が悪くなるから、嫌いと言ってる

「慢性」は通常医療用語で、病気や健康状態などに変化が見られないことを指す。しかし、KNは「言葉を話すのを継続する」というような意味で使用している。「変化が見られない」「続ける」という点を考慮すると、表現として共通点は見られるが、拡張されて使われている。

2.8. コロケーション

ここまでは個別単語の誤用だが、ここでは単語の組み合わせ（コロケーションの誤用）を見たい。「頭に来る」と「事故を出す」の二つの誤用をみでみる。HKは「その時頭に来ていたのは、どう帰ればいいのか、ということだった」のように、「思い浮かぶ」、「考える」という意味で「頭に来る」という言い方を使っている。

「事故を出す」は「事故を引き起こす」、「事故の原因となる」という意味で使われる。どうしてこういう誤用が見られる。それは日本語で「結果を出す」や「失業者を出した政策」のような用法への類推から生まれたと思われる。

このほかに、「時間つぶした→時間がかかった」、「ハンドルを折る→ハンドルを切る」といった誤用も見られた。

2.9. 「類似語混同現象」

さらに、HKには興味深い誤用現象が見られる。誤用は多くの場合「意味論的誤用」、「音韻論的誤用」、「語彙論的誤用」、「形態論的誤用」などのように分類することが可能であるが、以下では「類似語混同現象」という類の誤用を提唱してみたい。まず、その例を先に表2で紹介する。左側の単語（表現）は実際に話者が間違って使った語（誤用）で、右側は文脈から判断して言いたかった語（目標語）である。

表の誤用例のように、意味と形式（発音）の両方が、使おうとしている「目標語」に近い。なお、ここで提唱しているのは「類似語」であり、類義語とは異なる。「類義語」は意味だけが似ている単語のことを指すので、形式（発音）が似ているかどうかは関係ない。

類似語の取り違いを「類似語混同現象」と呼ぶことにする。表の誤用に、例えば「じむいんが……」という発話があったが、話者が言おうとしていたのは「従業員」であった。なお「非母語話者は全部この類の物だから特別なカテゴリーを作るのは大げさだ」という反論があるかもしれないが、けっしてそうではない。「従業員」と言おうとして、「じごういん」のように、実在しない形を

使うという誤用も有り得るはずだが、実際に見られたのは単語が実在する「じむいん」（事務員）なのである。

表2 HKの類似語混同現象

誤用	目標語
事務員	従業員
自分の家庭と一緒に住んでいる	家族
(船酔いして) ゲリ	ゲロ
面白かった	恐ろしかった
(車を) 前で運動する	運転する
会社を経由している	会社を経営している
一日10セント	10銭
車が過ぎ去った	車が通り過ぎた

また、話者HKが使った「ボンボロの車」という例は「類似語混同現象」ではないので、対照的な例として最適である。これはおそらく話者が「オンボロ」と「ボロボロ」の二つの単語を混乱させたことによって作られたと思われる。「混同現象」というより、二つの単語を混ぜてしまった「混同現象」と言えるかもしれない。しかし、この場合の「ボンボロ」という単語は存在しない。これと違って上の事務員→従業員の誤用の場合、「事務員」は（この発話では明らかに間違いであっても）単語としては存在するのである。それが以下で取り上げる「類似語混同現象」に共通して見られる特徴である。

似たような類似語の取り違いが日本語母語話者の会話（熟語など）にも見られる。しかし、母語話者の場合そのほとんどはミスタイク（口が滑った）だけであり、エラー（間違っただけのもの）ではない。HKの場合はエラーがかなり含まれている。その根拠として（1）言い直さないことと、（2）同じ間違いが繰り返し見られること、が挙げられる。

以上のことをまとめると、「類似語混同現象」とは（1）発音や文法的な誤用ではなく、単語や表現レベルの誤用であり、（2）間違っただけの単語は実際に存在し、（3）誤用で使われた単語と目標語は形式（発音）も意味も似ているというものがある。

2.10. 「或る」の拡大用法（程度副詞パラダイムの統一）

ここで「ある人」のように「ある＋名詞」の表現について考察する。日本語の「ある人は大統領に文句を言う」の場合の「ある」は「特定の人」という意味になる。しかし、日本語世代の話者に見られる「ある」の使い方が違う。次の例を見よう。

17. R：パラオの女性はよく働きますね。

HK：ある人はね。

18. HK：ある時、私は男に生まれて良かったと思う。

19. R：日本人もパラオ語をしゃべっているんですか？

HK：ある日本人は、ずっとここにいる日本人はしゃべっていますよ。

聞くのは充分は聞くけど。言うのは、ある部分は言えない。

例17の発言の意味は「よく働く人もいる」であり、日本語からすれば「ある」の意味用法上の誤用に当たる。例18では、「私は男に生まれて良かったと思う時がある」という意味であり、発話時の文脈で「ある時にふと思った」のように特定の時を言っているのではない。これも「ある」の意味用法上の誤用である。例19では、「ある日本人は」と言って、言い直しているが、もしかしたら、多少の文法性判断ができていて訂正したのかもしれない。また「ある部分は言えない」とは「言えない部分もある」ということである。

さて、パラオ語を母語とする日本語世代の話者はなぜこのような言い方をするのであるだろうか。日本語において、「多い」や「少ない」など量を表わす表現にはほぼ同一の構文も用いられる。しかし、多いか少ないかをはっきりしない「不定」の表現にはまったく異なる構文のみが使われる。詳しいことは表3を使って説明する。

パラオ語において少量について語るときは例文aのように語順が使われる。参考まで英語も載せた(b)。日本語でこれに対応する語順はある(c)ので、パラオ人(英語圏人)にとって特に習得しにくい日本語ではなからう。多量を示

表3 計量表現の構造

	言語変種	意味	例文（要素別に分けた） 対応するパラオ語		
a.	パラオ語	少ない	Bebil	el chad	menga el olfk
b.	英語	少ない	A few	people	eat bat
c.	標準日本語	少ない	僅かな	人だけが	コウモリを食べる
d.	パラオ語	多い	Betok	el chad	menga el olfk
e.	英語	多い	Many	people	eat bat
f.	標準日本語	多い	多くの	人は	コウモリを食べる
g.	パラオ語	不定	Sésel	el chad	menga el olfk
h.	英語	不定	Some	people	eat bat
i.	話者の中間言語の誤用	不定	ある	人は	コウモリを食べる
j.	標準日本語	不定	コウモリを食べる	人は	いる

す言い方においても同様のことが言えよう (d, e, f)。

一方、量が不定である（多いか少ないかをはっきりしない）場合、パラオ語では少量の表現と多量の表現に対応する言い方が使われる (g)。英語も同様である (h)。しかし、(j) の「コウモリを食べる人は (も) いる」で示したように、標準日本語では (f) や (c) に対応する語順はない。(i) の中間言語的な語順は、母語の影響を受けて、不統一である標準語日本語のパラダイムを完成させたものとも言える。

さらに、上記 (2.5節) でHKが使っている「わずかの卵は食べる」を「形容動詞+の」の形態論的な誤用例として取り上げたが、統語論的にも誤用であり、正用は「僅かな卵しか食べない」である。そのような「わずかノ名詞+動詞肯定形」の誤用の原因は、共起の問題としても捉えられるが、「多くの名詞+動詞肯定形」のように計量表現が文頭に来る構文からの類推によって起こったとも捉えられる。

2.11. 「証拠性」関連表現の過剰使用

戦前話者の日本語には伝聞の「～そうだ」や様態の「～らしい」といった「証拠性」(evidentiality) 関連の表現が頻繁に使われている。日本語において、「証

扱性」関連の表現は義務的ではない。つまり、話者が直接経験していない事柄について「あの船は遭難したそうだと」いう発言でも良いが、自分が見聞きしたわけではないのに「あの船は遭難した」だけでも間違いではない。以下の例は、「そうだと」が過剰に使用されている例を見る。

20. HK: あの、アメリカからスパイを呼んだそうだと。その方は、二世、日本の方

R: あー亡命したんですね。

HK: 話で聞くと、あの、上がって、偉い兵隊さんたちホームに行ったときは、アメリカのパンツをはいてたそうだと。それで、お前はなんでアメリカのパンツはいてるんだって、聞いたそうだと。

例文20では、HK が戦時中のアメリカ人のスパイについて語っている場面である。もちろん筆者らはその話を知らないわけであるが、HK は全ての文末に「そうだと」を使っている。話し手が知っている情報を相手に伝える場合は、それが伝聞であるということを伝えず、断定で話すのが普通である。特に、インタビューのような情報聴取者と情報提供者というような関係がある会話では、情報提供者は断定的に述べるのが期待される。その上で、情報が不確かであるということや、情報に対して責任が持てないというようなことを示す時には「らしい」を使用する。

HK の場合、聞き伝えの話は全てこの「そうだと」が使用されている。つまり、聞き伝えの話には「そうだと」を使用するのがデフォルトになっている。対して、日本語母語話者であれば、聞き伝えの話でも、「そうだと」を使わずに断定で述べるのがデフォルトである。一連の出来事の全てに対して「そうだと」を使用しない代わりに、話の初めに「聞いた話だけど」「実は自分もよくわからない」など、不確定の理由を伝えることによって伝聞であることを示すだろう。HK は大部分に「そうだと」を使うが、不確定の理由を述べる前提はあまり述べていなかった。

また、普通体の伝聞「～したそうだ」という表現がそもそもミスマッチで、そこにも不自然に聞こえる原因の一つがあると思われる。

日本語母語話者の発話に、「～そうです」と「～そうだ」のどちらを多く聞くかという点、前者だろう。それは「～そうだ」という表現そのものはフォーマルの場面に出現しやすいことに起因するかもしれない。「～したそうだ」という表現は伝聞で、話者は命題の真否については責任が持てないという証拠性（エヴィデンシヤリティ）を現わす表現である。丁寧体で話すフォーマルな場面ではより証拠性を明示し、情報の信頼性を示さなければならないが、普通体の会話では、そのような「～したそうだ」によって情報の信頼性をあげる必要がない。

また、別の話者 TA にも HK と同様、違和感のある証拠性関連の表現を使用しているのである。TA の場合は「伝言」の「そうだ」ではなく、「様態」の「らしい」をよく使っている。

2.12. 敬語の用法と理解

話者 HK は形式ばった会話でない日常的なやり取りにも敬語を多く使用している。まず、2.3節で沖縄ウチナーヤマトウグチの影響として論じた「方（あの方、あの方々、あなた方）」が見られる。しかし、前述のようにこれには待遇の意味が付与されていない。同じように人称代名詞としての「あれ」にも待遇の意味が付与されていないようであった。また、美化語「お部屋、お饅頭」など HK は美化語の「お」を多用する傾向にあった。また、尊敬語の「行かれる」も使用が頻繁に見られた。どれも HK が筆者らに待遇の意味を含めて話しているわけではないようであった。

一般的に第二言語話者は、母語話者よりこのような発話スタイルが簡略化される傾向にある。HK にもそれが当てはまり、少なくとも尊敬語や美化語などの待遇形式には、待遇意図が付与されていない傾向が見られる。

2.13. 音声的誤用

HKの音声的特徴はほぼ完璧にネイティブ並みの発音と言える。分節的特徴(母音、子音)はほとんど日本人と変わらない。「通った」を「とった」と発音したりする程度の誤用は見られるが、これらは体系的な誤用ではなく、(突発的であるため)発音のミスと判断すべきだと思われる。しかし、KNには一点のみ特徴的な発音が見られた(例文21)。

ここでは、音位転換(Metathesis)が起こっている。つまり、[hatsuon]の[o]と[n]の位置交代が起こっているが、パラオ語の音韻体系において、[n]がなく、鼻音は[m]と[ŋ](綴り字はng)だけなので、KNの発音で[hatsuŋo]となるのである。なお、この音位転換はKN以外のパラオ語話者の日本語に見られていない。ちなみに、音位転換はネイティブ日本語では、新たな/aratana/と新しい/atarashii/や、雰囲気/huNiki/と/huiNki/などが見られる。

補足として、TAには、例22のように「つ」が「ちゅ」になる発音上の誤用がいくつか現れている。全ての「つ」が「ちゅ」になるわけではないが、ところどころでそうした発音が表れた。つまりTAは「つ」と「ちゅ」を音声的に習得しているが、音韻的に区別されず、変異になっている。

21. 日本語話す時は発音 [hatsuŋo] が悪くなるから、嫌いと言ってる
22. 僕とあいちゅ(あいつ)だけだ

3. 若年層話者の日本語の特徴

3節では若年層話者を分析していく。話者はカヤンゲル州事務所で紹介してもらった Lerry Ruluked (LR:1975年生まれ)であった。彼は1999年に日本(三重県津市)で10か月間働いたところで、日本語を覚えた。パラオの大学でも日本語を学習している。なお、調査の際に同席していた父 Eos Ruluked は戦後生まれだが、周りで話されていた日本語を耳にして育ったため、ある態度調査者の日本語の質問が理解できた。二人の答えには日本語と英語とパラオ語の3言

語を使った。

なお、2012年7月29日に、もう一人の若年層日本語話者、Erik Vereen (EN) に1時間程度の半構造化インタビューを行った。しかし中間言語的誤用よりもむしろ高度な文法事項の非用（強いて言えば「回避」）が目立ったため、以下で使用例を挙げていない。次節で少し触れるのみである。

3.1. 連体修飾

連体修飾の構造は日本語の文法項目として、最も習得が難しい項目のひとつであり、習得過程に関する研究は数多く行われている（大関2008aなど）。自然習得の話者に関しては同じように多くの誤用例が見られる。

23. 政府とかもあるから、いいの仕事があるね

LRには例23のように連体修飾の「の」を挿入する誤用が多い。正用と誤用はある程度の規則性が見られるようである。そのため、正用と誤用の両方を全て取り出し、表4にまとめる。

表4 話者LRの連体修飾の正用・誤用

正用	政府で働いてる人 これは死んでるサンゴ パラオで飼ってたヤシの木
誤用	カヤンはおなかあんまりすかないの国 政府とかもあるからいいの仕事があるね 昔の時は、あまり魚売ることはない。 同じの仕事はカヤンゲルではない

表のように、正用は動詞にテイルがついた形態に関してのみ表れる。逆に、その他「の」が使用されない連体修飾句に関しては、全て「の」が挿入されている。正用が表れた動詞+テイルは寺村（1992）の言う、「内の関係」であり、格関係が明確なため、「の」を入れなくても関係が明白である。対して、誤用が表れた「魚売ること」「同じの仕事」は単純な格関係だが、「外の関係」で

あり、連体修飾の関係が明確ではない。そのため修飾関係を明確にするために、「の」を挿入する意識が働き、誤用となったのであると考えられる。

3.2. 時 制

パラオ語には、過去形と現在形を動詞の形態で分けることがない。Lは過去形と現在形の両方を使用しているが、過去形を使うべきところでの現在形の使用が多く見られる。

24. LR: だって、その昔の時はあまり、魚売るのはない

25. R: え、でもカヤンゲルでは日本語を話してなかったんですか?

LR: あーカヤンゲルで、知ってるけどは、あの一、おじさんたちとあばあさんたちが、日本語で話してる。

例文24は、「昔」という過去の時を表す語が入っているため、「ない」ではなく「なかった」を使うべき文である。また、例文25では、筆者（今村）が、「LRがカヤンゲルに住んでいた時に、日本語を話していなかったのか」という質問をした。それに対する答えとしてLRは過去の話をする中で現在形を使用している。現在形には物語を生き生きと描写する史的現在用法が存在するが、そのような用法は普通モノローグの談話で使用される。LRの場合、ダイアログとしてのインタビューの中でも過去のことを現在形で使用されることが多いため、どの事象がどの時に起きたのかが把握できない程になっている。

3.3. ノダ文

ノダ文は、教室習得者は使用自体が少ないが、自然習得学習者には使用が多く、誤用が多い傾向が明らかになっている（峯他2002）。同様にLRにはノダ文の誤用が数例見られた。例文26では、「から」によってつくる理由の従属節の中に、「んです」が入るため、従属節の部分に情報の焦点化が起り、文がおかしくなっている。なお、小金丸（1990）はこのような誤用が日本語学習者

の作文にも表れ、非難の意味を伝えてしまう危険性を指摘している。

26. LR: パラオ人のフィッシングのやり方はちょっと違ってたんだから、多分沖縄は、一回出たら、いっぱい魚が取れるから、パラオ人はあまりやってなかった。

3.4. 二とデの混同

場所を表す格助詞「に」と「で」は共起する語によってどちらを取るかが決まる。典型的な例で言えば、「住んでいる」「行く・来る・帰る」などには「に」が共起し、「食べる・考える」などのその他多数の動詞には「で」が共起する。LRは場所格を表す「に」と「で」に誤用が見られた。なおこのような誤用は話者EVにも数例見られた。

27. LR: 日本の三重で10箇月研修して、それが終わったらまた戻って。(正用)
- 28a. LR: 仕事のために、住んでる、えっとコロールで住んでる。(誤用)
- 28b. LR: で、そのあとは、また日本に行って、で十箇月、津で研修に行った。(誤用)
29. EV: この時で、「この人いいね」と思った。

以上のように、「に」を使用するべきところで「で」を使用する例は28a、28bのように見られたが、逆は見られなかった。大多数の動詞で場所格は「で」を取るため、「で」の使用範囲を広げる形で、「に」を使うべきところにも「で」を使用している。動詞の場所格表すには、「に」と「で」が使用されるが、圧倒的に「で」の場合が多い。「に」をとる動詞は「住んでいる」「いる／ある」「行く」など少数であり、その他のほとんどの動詞が「で」をとる。そうしたことが起因して、LRは「に」を「で」に置き換える誤用が起こるのである。EVにも例文29のように、同様の誤用が起こっている。

3.5. 条件表現

LRの条件表現と時間表現には、文法的な間違えが多く見られる。条件表現には形式として「たら」「と」「なら」「ば」(「ても」)の4形式(5形式)認められる(大関2008b)。条件表現は時間性表現と重なる部分があるため、これらを一つの言語であらわす言語も多い(大関2008b)。LRの場合、時間表現にも条件表現にも、一つの形式「と」が利用されている様子が見られた。

30. LR: カヤンですんですと、あんまりおなかすくのことない。
 (カヤンゲルに住んでいると、あんまりおなかすくことがない)
31. LR: おじいさんは、名前書くと、カタカナで書く。
 (おじいさんは、名前を書くときはカタカナで書く)
32. LR: もしお客さんが泊まりたいと、カヤンのアバイに泊まる
 (泊まりたければ)

「と」が使用される典型例は、例文30のような、前件の生起がと後件の実現につながることを表す条件節である。例文30は正用だが、例文31のような誤用も多く見られる。

例文31では、前件「名前を書く」は後件「カタカナで書く」の生起条件として捉えることができない。つまり、条件表現「と」ではなく、時間性表現「とき」が正しい形だと思われる。このようにLRは条件表現「と」を時間制表現まで拡張利用している。さらに、例文32は、「もし前件の状況であれば、後件を行う」ということを表すために、条件接に「と」が使用されているが、「ければ」を使用するのが適切である。つまり、「ければ」にも「と」を拡張利用している。さらに例文33、34のような文にも「と」を利用している。

33. なんで(おじいさんがドイツ語を)わかると、一回ドイツ人が…来た。
34. えっと、なんでトゥーリスト、カヤンゲルで無理と、コロールではホテルあると、いろいろがある。

例文33は、「なんでわかるかという」という条件文として使われたものである。標準日本語では当然こうした因果関係を「と」のみで表すことができないが、話者は前件の「ドイツ語をわかる」に「と」を条件表現としてつけて、後件の「ドイツ人が……来た」につなげている。標準日本語なら「なんでわかるかと言う」と多少複雑な条件文を使う必要が出てくる。LRがこうした誤用を犯した背景には次のことがあると考えられる。条件表現としての「と」自体は存在する（雨が降るといつも中止になる）ことを意識して、こういう場面で条件表現の必要性を感じる。しかし、「かという」とのように「疑問形式+引用表現+と」のように組み込まなければならないという意識までは働かない。これは第二言語として日本語を話す筆者（ロング）の感覚としても理解ができるし、小笠原諸島の欧米系島民の日本語にも似たような用法が見られる。筆者（今村）の知人にも、「なぜかという」の代わりに「なぜという」を使用し、「か」を抜かす第二言語日本語話者が多い。しかし条件表現の「と」は意識され、文に残るのである。例文34の前半の「なんでトゥーリストカヤンゲルで無理と」も同じ原理である。

さらに、例文34の後半部分のように、「コロールではホテルあると、いろいろある」のように、前件と後件のつながり、「と」の機能が明確に分からないような文でも「と」が使用されている。恐らく「と」を口癖のように使用し、特に機能を意識しなくなっている可能性がある。

以上のように、LRは「と」に様々な意味機能を付与している様子が見られる。複文を生成する場合で、前件が後件成立の条件になったり、前件と後件が順接の関係になる場合に全て「と」が使用される。LRのような第二言語学習者が形式と意味機能を結びつけていく過程で、条件表現と言う目標言語の複雑なカテゴリーが簡略化されて、より少ない形式で多くの意味機能を表せるように再構成されているのである。

3.6. 若者ことば表現

LR には、例35のように「若者ことば」とも言える近年新しく変化した表現も見られた。「違かった」は動詞「違う」に形容詞の活用をさせたものであり、「違った」の比較的新しい形である。おそらく日本に滞在している中で身に付けたものであると考えられる。

35. ちょっと違かったね。

3.7. 音声的誤用

LR には、中間言語的な音声特徴も一部見られた。例36のように日本語の「つ」のような歯茎破擦音がパラオ語では存在しないため、「ちゅ」に代用されている。

36. LR：で、そのあとは、また日本に行って、で十箇月、ちゅ [津] で研修に行った。

3.8. 語彙的誤用

LR にはいくつかの語彙の意味論的誤用が見られた。例文37-39は全て意味論的な誤用である。例文38はパラオ語で「(動物を) 飼う」も「(植物を) 育てる」も同じ *omekeroul* を使用することが原因となる誤用であると考えられる。

37. ヤシの木が集まって⇒採れて

38. パラオで飼ってたヤシの木⇒パラオで育てていた

39. (日本語を) 知ってる⇒わかる

4. 話者間の比較

ここまで、パラオの戦前話者と若年層話者の日本語の特徴について記述、考

察してきた。ここで相違点、共通点を考え、それらがなぜ起こるのかについて考えてみたい。まずは、それぞれの特徴をまとめなおすと、表5のようになる。

方言的特徴は、戦前話者によく見られたが、若年層話者には、ほとんど見られなかった。戦前話者は当時のパラオに沖縄系住民が多かった状況からウチナーヤマトゥグチなどの特徴が入り込んだが、若年層話者の場合はそれほど方言の影響を受けていない。

文法的特徴は、質的に異なる点が見られた。残存日本語では、「或る」や「証拠性」の点に、特徴が見られた。それらは完全に誤用と言えない特徴、または気づかれにくい誤用である。対して、若年層話者は、「ニとデ」や「ノダ文」「条件表現」など、それぞれ日本語母語話者に誤用とすぐに気づかれるような点に特徴が見られた。

語彙的な特徴に関しては、戦前話者が様々な形で誤用が見られたのに対して、若年層話者は、母語の影響などからの意味的な誤用のみが見られた。戦前話者は、語彙の拡張利用や、類似語混同など、「母語話者に誤用と気づかれにくい誤用」であると考えられる。

発音の誤用に関しては、戦前話者が、音声として持っているが混同してしま

表5 戦前話者と若年層話者の特徴のまとめ

	戦前話者	若年層話者
方言的特徴	ウチナーヤマトゥグチ 八丈方言	若者ことば
文法的特徴	或る 証拠性	連体修飾 時制 ノダ ニとデ 条件表現
語彙的特徴	意味的拡張利用 類似語混同現象 コロケーション パラオ語語彙の入れ込み	単純な意味的誤用
発音の特徴	音韻論的な問題 音位転換	音声的な問題

う音韻論的な誤用、若年層話者が音声として「つ」を習得していない音声的な誤用をそれぞれ起こしている。

つまりまとめると、戦前話者と若年層話者の日本語には、方言的な特徴、中間言語的な特徴が見られるが、それらは質的に異なっている。結果として、戦前話者はより自然に（母語話者のように）聞こえやすく、若年層話者はより第二言語話者に聞こえやすい日本語となっている。もちろん、これは全体的な話であり、各個人の日本語の能力差も考慮しなければならない。これまで調査を行ってきた話者のレベル差を考慮して、誤用の頻度との関連を概念図で表わすと図2のようになる。

図2に戦前話者と若年層話者の特徴の差を、誤用数を日本語レベルと関連づけて概念図を表す。戦前話者と若年層話者は、日本語習得や維持、使用環境など、習得背景が異なる。そこから2者間の日本語の特徴の質的差異が表れている。

若年層話者は、話者間のレベル差は主に学習年数や、日本語使用の機会の多少によって決まる。日本語レベルが低い場合、語彙・文法的な知識の制約、運

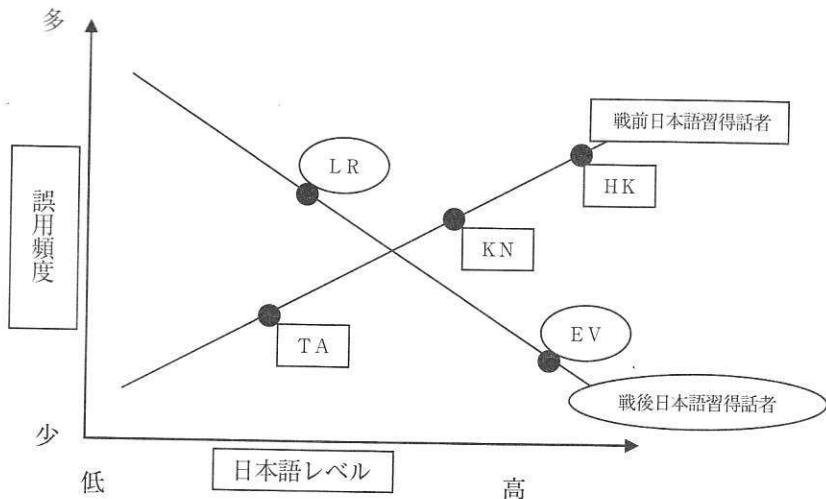


図2 戦前話者と若年層話者の日本語レベルと誤用頻度の関連概念図

用能力の制約があるため、限られたリソースで多くのことを表現せざるを得ない。結果として、日本語の知識や運用能力が低い段階学習初期では、基本的な語彙や文法に誤用が起こる。学習が進むにつれて、語彙や文法のミスが自然と少なくなる。また、学習が進むと、自信のない語彙や文法は使用しないという、いわゆる「非用」が起こることも上級段階でのミスを減らす要因となる。

対して、戦前話者は、話者間のレベル差は、どれだけ日本語を維持しているかということによって決まる。話者が日本語を使用しない場合、語彙や複雑な文法が失われてしまう。しかし、日本語の基本的な文法ルールや語彙は維持しているため、日本語の運用レベルが低くても、中間言語的特徴はほとんど見られない。上級の戦前話者 EV のようにわからない言葉や文法は使わない「非用」もその傾向を助けている。逆に日本語を高度に維持している場合は、正しくない語彙や文法を自分の判断で使用する傾向にある。長期間の日本語話者として、または話者によっては日本人の父親を持つ者として、誤用を犯さない自信があることが一つの要因であろう。また、社会の言語規範から離れた若者ことばから新しい語彙や文法が生まれるように、パラオでは、日本本土からの規範から解放された結果として、誤用として起こってくるのである。

一般的な言語話者が誤用を犯さないのは、共有された言語規範による。真田 (2009) が指摘するように旧植民地は日本本土と距離があり、言葉の解放区であるため、そのような言語規範意識が低いのであり、結果、言語能力の高い戦前話者に特徴がある表現や文法が見られるのである。

本稿では、パラオにおける戦前話者と若年層話者の記述・考察を行い、比較をした。結果、戦前話者と若年層話者の日本語には、方言的な特徴、中間言語的な特徴が見られるが、それらは質的に異なっていることが分かった。

謝辞

本研究は、Kyoko Ngotel, Toshiwo Akitaya, Lerry Ruluked, Erik Vereen の協力によって成り立っている。特に Humiko Kingzio には、多大な協力を賜った。ここに話者の皆様へ感謝の意を表したい。

参考文献

- 今村圭介 (2012) 「在日ドイツ人学校生徒の言語使用」『日本語研究』32:131-144
- 大関浩美 (2008a) 『第一言語・第二言語習得における日本語名詞修飾節の習得過程』くろしお出版
- 大関浩美 (2008b) 「学習者は形式と意味機能をどのように結び付けていくか—初級学習者の条件表現の習得プロセスに関する事例研究—」『第二言語としての日本語の習得研究』11:122-140
- 真田信治 (1996a) 「チューク語 (ミクロネシア) における日本語からの借用語」『言語学林 1995-1996』三省堂
- 真田信治 (1996b) 「一型アクセントとしてのチューク語—ミクロネシアでの言語調査から—」『日本語研究諸領域の視点 上巻』明治書院
- 真田信治 (1997) 「コスラエ語 (ミクロネシア) における日本語からの伝播語の音的特徴」『日本語の歴史地理構造』明治書院
- 真田信治 (2002) 「ボナペ語における日本語からの借用語の位相—ミクロネシアでの現地調査から—」『国語論究 9 現代の位相研究』明治書院
- 真田信治 (2007) 『方言は気持ちを伝える』岩波ジュニア新書
- 真田信治 (2009) 『越境した日本語—話者の「語り」から—』和泉書院
- 渋谷勝己 (1999) 「ミクロネシアに残る日本語②—パラオの場合—」『月刊言語』28-6:76-79
- 渋谷勝己 (2001) 「パラオに残存する日本語の実態—報告書・序章—」『環太平洋地域に残存する日本語の諸相 1』『環太平洋の言語』報告書 A4-005, 81-96
- 鈴木重幸 (1978) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 小金丸春美 (1990) 「作文における『のだ』の誤用例分析」『日本語教育』71
- 南洋庁編 (1934) 『第二回南洋庁統計年鑑』南洋庁
- 峯布由紀・高橋薫・黒滝真理子・大島弥生 (2002) 「日本語文末表現習得の一考察—自然習得者と教室習得者の事例をもとに—」『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』科学研究費補助金研究報告書 pp 64-85
- 由井紀久子 (1996) 「旧ヤップ公学校卒業生の日本語談話能力—訂正過程についての

- 由井紀久子 (1998) 「パラオ語に受容された日本語を起点とする借用語」『京都外国語大学研究論叢』 51
- 由井紀久子 (1998) 「旧南洋諸島における日本語教育の諸問題」『無差』 5
- 由井紀久子 (1999) 「パラオ語の感覚語彙と日本語からの借用語」『無差』 6
- ロング、ダニエル&新井正人 (2012) 『マリアナ諸島を残留する日本語—その中間言語的特徴—』 明治書院
- Auer, Peter (2007) “The Pragmatics of Codeswitching : A Sequential Approach.” In Li Wei, ed. *The Bilingualism Reader*. London : Routledge, 123–138.
- Josephs, Lewis S (1979) “The influence of Japanese on Palauan.” *Papers in Japanese Linguistics* Vol. 6. Los Angeles : Japanese Linguistics Workshop, Univ. of Southern California
- Miyajima, Tatsuo (1998) “Linguistic consideration of the Micronesian ways of life during the Japanese occupation.” In Toki (1998), 15–24.
- Sanada, Shinji (1997) “Phonological Characteristics of Japanese-derived Borrowings in the Trukese of Micronesia.” 『日本語科学』 1 : 49–62.
- Sanada, Shinji (1998) “Characteristics of Japanese Loanword Vocabulary in Micronesian Languages” In Toki (1998), 63–94.
- Shibuya, Katsumi (1998) “Grammatical aspects of an interlanguage : the potential expressions of Yapese Japanese.” In Toki (1998), 49–61.
- Toki, Satoshi (1998) “The Remnants of Japanese Phonology in the Micronesian Chuuk.” In Toki (1998), 25–48.
- Toki, Satoshi (ed 1998.) *The Remnants of Japanese in Micronesia*. Memoirs of the Faculty of Letters. Osaka University. 『大阪大学文学部紀要』 38
- Yui, Kikuko (1998) “The Formation of Micronesian Japanese : Teaching Japanese at Public Schools in Nan'yōguntō.” In Toki (1998), 7–14.